

【オフィシャルパートナー企業インタビューシリーズ】

日本ゴールボール協会をさまざまな形で応援してくださっているオフィシャルパートナー企業の皆さんに、各社のお取り組みや想い、当協会への期待などを伺うインタビューシリーズです。

<第4回：日本郵政株式会社様> [取材日：2020年10月20日]

日本郵政は、日本郵便・ゆうちょ銀行・かんぽ生命保険等で構成される日本郵政グループの持株会社です。郵便局ネットワークの安心・信頼を礎として、地域のお客さまの生活を支援する「トータル生活サポート企業グループ」を目指しています。

スポーツの支援にも熱心で、2014年4月に「日本郵政グループ女子陸上部」を創設し、駅伝を中心に中長距離選手の育成・支援に取り組んでいるほか、2015年8月20日には「東京2020 オフィシャルパートナー（郵便）」契約を締結し、大会成功に向けて活動しています。また、2019年3月から3×3バスケットボール日本代表にも協賛しています。

▼公式サイト：<https://www.japanpost.jp/tokyo2020/>

日本ゴールボール協会とは2019年3月26日に、オフィシャルパートナー契約（カテゴリー：郵便、宅配、物品輸送）を締結。以来、さまざまな応援をいただき、2020年11月20日からは新企画、「日本郵政ゴールボール応援プロジェクト」もスタートしています。

今回は、日本郵政グループの東京2020大会に関わる業務を担当されている池辺恭平さん（日本郵政株式会社オリンピック・パラリンピック室マネジャー）と橋川博一さん（同主任）にお話を伺いました。（以下、敬称略）

▼ゴールボール支援の取り組み（日本ゴールボール協会とのパートナー契約締結のお知らせ）：

https://www.post.japanpost.jp/notification/pressrelease/2019/00_honsha/0328_02_01.pdf

<「言葉で想いを伝える大切さ」に共感。競技の進化に寄り添っていきたい>

——障がい者スポーツ支援のきっかけや背景、経緯から教えてくださいませんか？

橋川

日本郵政株式会社は2007年に民営化する前から、郵便局入り口にスロープを整備するなどバリアフリー化を図り、障がいのあるお客さまに寄り添った企業を目指す取り組みをしてきました。また、長年、点字郵便物などを取り扱ってきた歴史もあり、社の取組としてパラスポーツの支援もより強化しようとしています。

当社が障がい者スポーツ団体をスポンサーするのは日本ゴールボール協会が初めてになります。また、パラ卓球の別所キミエ選手を2015年から協賛していますし、日本郵政グループのかんぽ生命保険は2018年から日本車いすテニス協会のトップパートナーを務めるなど、さまざまな形で障がい者スポーツ支援に取り組んで

います。

——数ある障がい者スポーツの中で、ゴールボールを選んでいただいた理由を教えてください。

橋川

ゴールボールは3人1組で行うチームスポーツで、言葉によるコミュニケーションが重要な競技です。その特徴に大きく共感しました。当社も、「想いを伝えるというコミュニケーション」と「地域に寄り添う」ことを業務の根本としているからです。

私自身、ゴールボールを体験してみて、アイシェードをすると全く見えないので手を叩いたり声を出したりして自分の存在を知らせなければならない、仲間同士で互いを思いやることが欠かせない、など競技の特徴を実感しました。

郵便事業では「人と人の想いを届ける」、銀行や保険などの金融事業では「身近な存在として、人の挑戦を後押しする」といった理念があり、その点もゴールボールとの親和性があると感じています。

それに、ゴールボールの日本代表は強豪チームで、男女とも東京パラリンピック出場が決まっています。大会を機にさらに競技が発展するだろう、そしてその発展に私たちが貢献したいという想いもありました。

池辺

もう一つ大きかったポイントは我々が協賛競技の検討に入った時点で、ゴールボールは認知度が低い点も含め、発展途上の競技であると感じたことです。競技自体も魅力的で、ロンドン2012パラリンピックでの女子代表の金メダル獲得などの実績もあり東京大会でのメダル獲得の期待度が高いにも関わらず、なぜかまだあまり知られていない点に注目しました。

ゴールボールは他のパラスポーツに比べ、類似のオリンピック競技がない障がい者スポーツ特有の競技なので、多くの人にとっては「未知の競技」です。そういう「未知の競技」を当グループの40万人を超える社員が知り、全国に約24,000ある郵便局が広告塔となって広めることで、障がい者理解にもつながり、社会が変わると思いましたし、そうしてお客さまの生活向上にもつながれば素晴らしいなと思いました。

——たしかに、ゴールボールと郵便における「言葉の重要性」はリンクしますね。では、支援活動として、これまでどのようなお取組をいただいていますか？

橋川

主な活動の一つは、「大会や体験会へのボランティアの派遣」です。社員から広くボランティアを募集し、全国各地のイベントに参加しています。例えば、2019年の日本選手権とアジア・パシフィック選手権大会に、約20人の社員が大会ボランティアとして参加しました。

池辺

事前に「オフィシャル・クリニック」を受講して競技ルールなどを学んでから、試合運営を支えるオフィシャルも務めました。観戦だけでなくオフィシャルまでできるなんて、他の競技ではなかなかできない貴重な経験でした。今後、オフィシャルの資格を持つ社員を増やしていけば、さまざまな地域で大会を開催しやすくなるなども感じています。

——他の競技ではなかなかできない、とは？

池辺

例えば、当社は東京 2020 オリンピックで新しく採用される競技、3×3 バスケットボールにも協賛していますが、パートナー企業の社員が試合の審判などで大会運営に貢献することはなかなか難しいです。

一方で、ゴールボールは歴史も浅く携わる人材も少なく、大会運営も協会が手作りされているようなところがあり、我々ボランティアもオフィシャル・クリニックを受ければ、試合に直接携わることができます。達成感がありますし、「我々も一緒に競技を作っている」と感じられるのは、他の競技にはないゴールボール支援の魅力の一つではないでしょうか。

——なるほど、御社の理念でもある「寄り添う」という感覚でしょうか。

橋川

そうですね。昨年の日本選手権では男子決勝戦のゴールジャッジ 4 人のうち 1 人を当社社員が務めました。役目の一つは転がってきたボールを止めることですが、後ろに逸らすと試合の進行に影響します。また、選手が足を滑らさないよう汗で濡れた床をモップで拭うことも大切な役目ですが、思った以上に激しい競技なので選手は汗だくで床が濡れやすく気を遣ったそうです。それに、決勝戦だったのでとても緊張したようですが、最も臨場感のあるポジションから試合を間近に見ることができ、「迫力があって楽しかった」と感想を話していました。

——責任感もありますが、ワクワクする体験とも言えますね。他の活動もご紹介ください。

橋川

東京 2020 のオフィシャルパートナーとして大会 PR イベントに参加する際に、ゴールボール体験ブースを運営しました。アイシェードを着けてボールを投げるといった体験会ですが、すでに 3,000 人以上の方に体験いただきました。「真っ暗で怖い」「全然動けない」などリアルな感想を抱きつつ実体験してもらいました。実際に体験することでいかに選手がすごいのかを感じていただくなど、競技の理解促進に役立てればと思います。また、使用済みの切手を利用してモザイクアートを作製し、ゴールボールを題材にした「切手アート」として大会会場に展示し、大会の盛り上げにも貢献しました。

——イベントや試合会場以外の活動もあれば、教えてください。

橋川

女子日本代表の浦田理恵選手をお招きし、社内で講演会を開きました。社員 100 人以上が集まり、お話を聞いて涙を流した社員もいました。参加者は皆、講演会后に「浦田選手から勇気もらった」などのポジティブな感想を話していました。ゴールボールに協賛していなければ得られなかった、素晴らしい気づきになりました。

——印象に残っているお話はありますか？

橋川

そうですね、浦田選手は大学時代に視力を失い、家族にさえなかなか相談できないほどショックを受けたものの、一步を踏み出す勇気を持つことで、自分の障がいについても語ることができ、前を向くことができたというお話が特に印象に残っております。私たちも人に寄り添い、一步を踏み出す勇気を後押しすることを大切に

していかなくてはと思いました。「お困りの方に気軽に手を差し伸べられる社会づくり」の大切さなどを発信していきたいな、と思いました。

——協賛をはじめから、御社内に何か変化はありますか？

池辺

社内のゴールボール認知度は上がっていると感じています。ゴールボールはどんな競技であるか、例えば「目隠しし、鈴が入った重いボールを投げ合うスポーツ」だと説明することができる社員が、確実に増えている印象があります。

橋川

日本代表の信澤用秀選手にお越しいただき、社員向けの体験会を実施したこともあります。間近で信澤選手のプレーを見たり、アイシェードをして試合を行ったりしました。「実体験して競技の奥深さがわかった」「コミュニケーションの大切さに気づけた」などといった感想が聞かれました。

視覚障がいの方としてのご意見やお話をいただきましたが、これはもっと多くの社員が知るべきだなと思いました。例えば、物の位置や方向を時計の短針に例えて示す「クロックポジション」や、分かりやすい声かけの仕方などは、通常の業務ではなかなか身につけにくい知識です。これもゴールボール協賛を契機に学んだ付加価値だと思いますし、全国の社員が知ることで、そこを起点に社会にも広げていければと思います。



社内の東京 2020 大会のPRコーナーには、ゴールボール日本代表選手のパネルも！

——では、東京パラリンピックの1年延期による支援活動への影響についてはいかがですか？

池辺

我々は1年の延期を「普及活動の期間が延びた」とプラスにとらえています。「2021年夏に盛り上げのピークをつくろう」と目標を切り替え、これからの1年でゴールボールの認知度をより高めるさまざまな企画を考えています。

その第1弾として11月20日から、郵便や手紙の原点である「想いを届ける」というコンセプトで、「日本郵政ゴールボール応援プロジェクト」がスタートしました。

▼日本郵政ゴールボール応援プロジェクト

https://www.japanpost.jp/goalball_project/

——御社らしいコンセプトですね。もう少し詳しい内容をご紹介しますか？

橋川

音の熱き戦い・ゴールボールの「音」で判断するという魅力に焦点を当て、同じく「音」のプロである、声優の下野紘さんと内田真礼さんに「日本郵政ゴールボールアンバサダー」に就任していただき、競技や選手の魅力を伝えるさまざまなコンテンツをお届けするプロジェクトです。

例えば、お二人によるゴールボールの競技解説や日本代表の宮食行次選手、欠端瑛子選手との対談のコラム、さらにお二人をメインキャストに、宮食選手と欠端選手を主人公のモデルとした、オリジナルのサウンドドラマも制作し、特設ページで配信します。誰にも心に残る言葉や救われた言葉などがあると思いますが、言葉や想いを伝えることの大切さを題材にしたストーリーです。

下野さんと内田さんは全世代から人気がありますが、特に10代、20代の若い世代に人気が高いので、ゴールボールを若い人たちにも知っていただくチャンスかなと思っています。そこから、親御さん世代にも魅力が広がっていくことで幅広い方に知っていただければと期待しています。

——興味深いコンテンツが盛りだくさんですね。

橋川

その他にもコンテンツとして「想いを伝える」という当社の原点も踏まえた、「選手への応援メッセージをはがきで送ろう！」キャンペーンも実施しています。集まったメッセージは下野さん、内田さんの声にのせて、「声援」として選手へお届けする予定ですし、参加者の中からプレゼントも当たりますので、ぜひ多くの方にゴールボール選手や日本代表へのメッセージを送っていただきたいです。

——選手たちも1年延期を「より強くなるための期間」にしようと声を揃えています、大きな後押しになりそうです。

橋川

選手にとって目標が1年先に延びることはとても大変でしょうし、金銭面も含めて難しい環境にあると思います。パートナーとして私たちもいろいろサポートを考えていますし、協会の皆さんとも足並みを揃え、連携もさらに強めていきたいと考えています。具体的には、当社のSNSアカウントでも大会やイベント情報を発信していきたいですし、トリビア的な情報発信も面白いコンテンツかなと思っています。例えば、「試合は審判の『クワイエット・プリーズ、プレイ！』の声から始まる」などのルールは一般の方にはそれほど知られていないので“刺さる情報”ではないでしょうか。

ゴールボールの「目新しさ」や「新鮮さ」は強みだと思います。晴眼者（せいがんしゃ）にとって目をつぶって歩く経験はほとんどありませんから、ゴールボールを通して視覚障がいの方の空間認知方法や聴覚・指先の感覚の鋭さなども多様性の一環として、お伝えできればなと思っています。

池辺

「1粒で2度、3度と美味しい」のがゴールボールの魅力です。コミュニケーションの大切さや戦略性の面白

さをはじめ、ゴールボールに詳しくなると視覚障がいについても詳しくなれます。学べる領域がどんどん広がっていくところもすごく楽しいですし、そんな魅力を広めていきたいですね。



社内で展示されているゴールボールコーナーの前で、左から、橋川博一さん、池辺恭平さん

——では最後に、ゴールボール選手や協会へのメッセージをお願いします。

橋川

代表チームも1年の延期で大変だと思いますが、各地で活動するクラブチームは練習場所の確保にも苦勞するなど大変な状況ではないかと想像しています。我々もできるだけ寄り添って支えていきたいと思います。新型コロナウイルスの流行が落ち着いた先を見据えて、一緒に頑張っていきましょう。

池辺

選手や協会の皆さんの負担を少しでも減らせるよう、パートナーとして我々ができることには精一杯取り組んでいきたいと思っています。これからもぜひ、我々の希望であってほしいと願っています。

——ありがとうございます。応援プロジェクトも、多くの方に参加いただけたらと思います。これからもよろしくをお願いします。